

鶴は病みき

岡本かの子

青空文庫

白梅の咲く頃となると、葉子はどうも麻川莊之介氏を想い出していけない。いけないというのは嫌という意味ではない。むしろ懷しまれるものを当面に見られなくなった愛惜のところが催されてこまるという意味である。わが国大正期の文壇に輝いた文学者麻川莊之介氏が自殺してからもはや八ケ年は過ぎた。

白梅と麻川莊之介氏が、何故葉子の心のなかで相関^{あいかん}聯^{れん}しているのか、麻川氏と葉子の最後の邂逅^{かいこう}が、葉子が熱海へ梅を觀^みに行った途上であつた為めか、あるいは、麻川氏の秀麗な瘦軀^{そうく}長身を白梅が聯想^{れんそう}させるのか、または麻川氏の心性の或る部分が清澄で白梅に似ているとでもいうためか——だが、葉子が麻川氏を想い出すいとぐちは白梅の頃であり乍^{なが}ら結局葉子がふかく麻川氏を想うとき場所は鎌倉で季節は夏の最中となる。葉子達一家は、麻川莊之介氏の自殺する五年前のひと夏、鎌倉雪の下のホテルH屋に麻川氏と同宿して避暑して居た。

大正十二年七月中旬の或日、好晴の炎天下に鎌倉雪の下、長谷^{はせ}、扇ヶ谷^{おうぎやつ}辺を葉子は良人^{おとと}と良人の友と一緒に朝から歩き廻^{まわ}つて居た。七月下旬から八月へかけて一家が避暑する貸家を探す為めであつた。光る鉄道線路を越えたり、群る向日葵^{ひまわり}を処々の別荘の庭先に眺め

たり、小松林や海岸の一端に出逢^{であ}つたりして尋ね廻^{めぐ}つたが、思い通りの家が見つからなかった。結局葉子の良人の友人は葉子達をH屋の一棟へ案内した。H屋は京都を本店にし、東京を支店にし、そのまた支店で別荘のような料亭を鎌倉に建てたのであったが商売不振の爲め今年は母屋を交ぜた三棟四棟を避暑客の貸間に当て、京都風の手軽料理で、若主人夫婦がその賄に当ろうと云うのであった。

母屋に近い藤棚のついた二間打ち抜き^{はす}の部屋と一番端^{かぐらどう}れの神樂堂のような建て前の棟はもう借手がついていた。真中の極普通^{ごくふつ}な割り合^{わりあ}いに上品な一棟が、まだあいていたのを葉子達は借りることに極^きめた。どの棟の部屋もみな一側面は同じ芝生の広庭に面し、一側面は凡^{すべ}て廊下で連絡していた。

決めて歸りがけに葉子達は神樂堂の方の借主をどんな人達かと聞いて見た。五六人取り交ぜたブルジョアの坊ちゃん、若いサラリーマンや大学生達だとの事、それから藤棚の方はと聞いた時、

「麻川莊之介さん、あの文士の。」

H屋の若主人は（好いお連れ様で）と云わんばかりにやや同業者の葉子達の方を見た。

「ほう。」

葉子の良人は無心のように云ったが、葉子はいくらか胸にこたえてはつとした。

麻川莊之介と云えば、その頃、葉子より年こそ二つ三つ上でしか無かったが、葉子にはかなり眩^{まぶ}しい様な小説道の大家であつた。葉子のはつとしたのは、葉子の稚純な小説崇拜性が、その時すでに麻川氏に直面したような即感をうけた為めでもあつたろうが、ほかにいくらか内在している根拠もあつた。

葉子の良人戯画家坂本は、元来、政治家や一般社会性の戯画ばかり描いて居たが、その前年文学世界という純文芸雑誌から頼まれて、文壇戯画を描き始めて居た。文壇の事に晦^{くろ}い坂本はその雑誌記者で新進作家川田氏に材料を貰い、それを坂本一流の瓢^{ひょう}逸^{いつ}また鋭^え犀^{いさい}に戯画化して一年近くも連載した。これは文壇の現象としてはかなり唐突だったので、文人諸家は驚異に近く瞠^{どうもく}目したし、読者側ではどよめき立って好奇心を動かし続けた。なかで麻川氏の戯画化に使われた材料は麻川氏近來の秘事に近いもの——それももちろん川田氏から提供された材料だった。文壇に晦^{くろ}かった坂本が、さして秘事とも思わず取扱つた材料は、麻川氏にとつての痛事だったとあとで坂本に云う人がかなりあつた。

「そりやあ気の毒だったな。川田君も一寸^{ちよつと}つむじ曲りだから先輩に対する自分のうつぶん散しでもあつたかな、いくらか。」

とその材料を持って来た川田氏への心理批判も交って坂本は苦笑した。

その後短歌から転じて小説をつくり始めた葉子はその処女作を麻川氏の友人喜久井氏に始めて見て貰うことを頼んだ。だが喜久井氏はその時、文壇的な或る事業かくさくちゆう劃策中だったので、友人麻川莊之介に見て貰いなさいと葉子に勧めた。

葉子は早速麻川氏に手紙を書いたが、その返事がいつまでたっても来なかった。葉子は今迄ひとに返事の必要の手紙を出して返事を貰わなかった覚えが無かったので、いくらか消しょう気ですこし怨みがましい心持になつて居た処へ、ある人がそれに就ついて、

「あの人は、坂本さんの戯画の材料をあなたから出てるかと思つてゐるかも知れませんよ。そして用心深いから身邊を用心する為めにあなたを敬遠しちまつたのかも知れませんよ。」

と葉子に云つた。そう云われれば葉子は坂本より文壇に近いわけである。けれど文壇的せんえい社交家でない葉子は文学雑誌記者であり新進小説家としての川田氏が提供する程の尖鋭せんえい的な材料など持ち合はし得べくもなかったのだ。葉子はますます味気ない気持ちになつたが麻川氏がもしそういう用心をするならそれも当然な気がしたし、それやこれやで小説をひとに見て貰う気などはいつか無くなつて居た。

葉子という女性は、時によつては非常に執念深く私情に駆られるが、時によつてはまる

で別人のように公平で淡白な性質も持つて居る。麻川氏とのいきさつも理解がつくといつかさつぱりと、葉子の心に打ち切られて仕舞った。ところがそのすこしあと、葉子は全然別な角度から麻川氏を見かけた。それは或夜、大変混雑な文学者会が、某洋食店楼上で催され麻川氏もその一端に居た。渋い色金紗いろきんしゃの羽織がきちんと身に合い、手首のしまったきびきびした才人めいた風采ふうさいが聡明そうめいそうに秀でた額にかかる黒髪と共にその辺の空気を高貴に緊密にして居た。がさつな、だらしない風をした沢山の文人のなかに、そういう麻川氏を見て葉子はここにすがすがしく思い乍らなが、ふと、麻川氏の傍に嬌きよう然ぜんとして居るX夫人を見出した。そして麻川氏がX夫人に対する態度を何気なく見て居ると、葉子はだんだん不愉快になつて来た。麻川氏はX夫人に向つて、お客が芸者に対するような態度をとり始めた。葉子はそこで倫理的に一人の妻帯男が一人のマダムに対する不真面目な態度を批判して不愉快になつたのでは無い。(ましてX夫人は兼てかねから文人達の会合等に一種の遊興的気分を撒まいて歩く有閑婦人だった。善良な婦人で葉子はむしろ好感を持つては居るがからかわれて惜しい婦人とは思つて居なかった。)麻川氏を惜しむころ、麻川氏の佳麗な文章や優秀な風采、したたるような新進の気鋭をもって美の観賞を誤つて居るようなもどかしさを葉子は感じたからである。しかし、現在見るところのX夫人は葉子の

眼にも全く美しかった。デリケートな顔立ちのつくりに似合う浅い頭髮のウェーブ、しなやかな肩に質のこまかな縮緬ちりめんの着物と羽織を調和させ、細く長めに曳ひいた眉をやや昂あげて嬌然として居るX夫人——だが、葉子はX夫人のつい先日迄を知って居た。黄色い皮膚、薄い下り眉毛まゆげ、今はもとの眉毛を剃そったあとに墨で美しく曳いた眉毛の下のすこし腫はれぼつたい瞼まぶたのなかにうるみを見せて似合つて居ても、もとの眉毛に対応して居た時はただありきたりの垂れ眼であつた。今こそウェーブの額髪で隠れているが、ほんとうはこの間までまるだしの抜け上つたおかみさん額がその下にかくれている筈はずだ——葉子はその、先日までのX夫人を長年見て来たので、今日同じ夫人が、がらりと変つた化粧法で作り上げた美容を見せられても、重ね絵のようについ先日までのX夫人の本当の容貌ようぼうが出て来て、現在げんぱうのX夫人に見る美感の邪魔をする。それにもかかわらず麻川氏が変貌へんぱう以後のX夫人に、葉子より先に葉子の欠席した前回のこの会で遇あひ、それが麻川氏とX夫人との初対面であつたためか、ひどくこの夫人の美貌びぼうを激賞したということが、文壇の或方面やかまで喧やしく、今日も麻川氏はこの夫人を観みるために、この会へ来たとさえ、葉子の耳のあたりの誰彼さやが囁ささやき合つて居る。葉子の女性の幼稚な英雄崇拜觀念が、自分の肯がえんじ切れない対照に自分の尊敬する芸術家が、その審美眼を誤まつて居る、というもどかしさで不愉快になつたのだ。

と云つて、幾度見返しても現在のX夫人はまったく美しい。変なもどかしさだ。葉子は麻川氏と一緒に、X夫人の美を讃嘆さんたんして居ながら、何かにせものを随喜して居るような、自分を、麻川氏を、馬鹿にしてやり度たいような、と云つて馬鹿に出来ないような、あいまいな不愉快に妙に心持ちをはぐらかされた。

こんな気持ちに葉子はその当時、或る雑誌からもとめられた「近時随感」のなかに書いた。もちろん当事者の名まえなど決して書かずただ一種変つた自分の心理を叙述する材料としてかなり経緯けいゐをはつきり書いた。（それを麻川氏が読んだか読まないか葉子は当時気にもとめなかつたが、矢張り読んで居たことを一ヶ月間H屋に同宿して居るうちの麻川氏との交際で判わかつた。）

とにかく、こんな前提は、いよいよとなると葉子の心から一掃されて、葉子にはただ崇拜する文学者麻川莊之介氏と同宿するという突然な事実ばかりが歴然と現前して来るのであつた。その後の事を語る順序として葉子の鎌倉日記のうち多く麻川氏を書いて居る部分を摘出する。

某日。——麻川氏は私達より三四日後れ昨夜東京から越して来た。今朝早くから支那更しなざ

紗らさ（そんなものがあるかないか、だが麻川氏が前々年支那へ遊んだことからの聯想れんそうである。）のような藍色模様あいいろもようの広袖浴衣ひろそでゆかたを着た麻川氏が、部屋を出たり入ったりして居る。着物も帯も氏の瘦躯長身にぴったり合っている。氏が東京から越して来ると共に隣の部屋の床の間に、くすんで青味がかった小さな壺つぼが、置かれたよう（私の錯覚かしら）な気がする。宿の主人が置いたのか、氏が持つて来たのか、花は挿して無いし今後も挿さないような気がする。

某日。——麻川氏の太いバスの声が度々笑う。隣の棟に居て氏のノドボトケの慄ふるえるのを感じる。太いが、バスだが、尖鋭な神経線を束ねて筏いかだにしそれをぶん流す河のような声だ。

某日。——主人が東京から来たので、麻川氏はこちらの部屋へ挨拶あいさつに来た。庭続きの芝生の上を、草履で一步一步いんぎんに踏み坊ちゃんのような番頭さんのような一人の男を連れて居た。浅いぬれ縁に麻川氏は両手をばさりと置いて叮嚀ていねいにお辞儀をした。仕つけの好い子供のようなお辞儀だ。お辞儀のリズムにつれて長髪が颯さつと額にかかるのを氏は一々搔かき上げる。一芸に達した男同志——それにいくらか気持のふくみもあるような——初対面を私は名優の舞台の顔合せを見るように黙って見て居た。

某日。――朝、洗面所で麻川氏に逢う。あ「僕、昨夜、向日葵ひまわりの夢を見ました。暁あけがた方までずつと見つづけましたよ。」と冷水につけた手で顔をごしごし擦り乍ながら氏は私に云う。「それで今朝、頭が痛くありませんか。」私は何故だか氏に、こんなことを聞いて仕舞った。「ほおう。まるでゴツホの問答みたいですね。」麻川氏はこう云って、タオルで顔を拭き終えて私の顔を正面から見た。眼が少し血走って居る。氏は「は、」と一つ声を句切つて、「ではまた午後、……：昼前は原稿を書きます。」と云って叮ていねい嘖いにお辞儀をして部屋に入つて行つた。

午後わあわあと大声を立てる若い女が麻川氏の部屋へ来たようだ。夕方、恰好かつこうの好い中背の若い女の洋装姿が麻川氏の部屋から出て庭芝を踏んで帰るのを見かけた。横顔が少し下品だが西洋の活動女優のような線を見せた。「大川宗三郎君（作者註、大川氏は麻川氏の先輩で、その頃有名な耽美たんび派作家とも悪徳派作家とも呼ばれて居た。）の妻君の妹ですよ。赫子けしつてお転婆さんですよ。」と藤棚の下で麻川氏が云つた。番頭さんのような若い男が縁側で私の顔をうかがって居る。掃除した煙草たばこ盆を座敷に持って来た日屋譜代の婆やお駒さんは開けつぱなしの声で「へへえ、あれが大川さん御自慢の妹さんですか。」麻川氏は苦つぽく微笑して云つた「別に自慢でも無いだろうが、細君より気軽に何処へで

も連れて行ける女だからな。」「奥さんは日本風の顔立ちのおとなしい美人でしよう、妹さんは違いますね。」と私。麻川氏の番頭さんは云う「奥さんのような美人も好きだし、赫子さんのようなのも好きだし。」麻川氏「つまり、釈迦しやかに拝し、キリストに拝し……。」「マホメットには誰になる……ですかな。」と麻川氏の番頭さん。麻川氏「莫迦ばか。彼自身は飽あまで厳肅なんだぞ。」

某日。——二三日、画家のK氏が東京から来て麻川氏の部屋のメンバーになった。うわさ 噂によれば夏目漱石先生が津田青楓氏を師友として居た以上K氏と麻川氏は親愛して居るのだそう。K氏は、頭を丸刈にしたこつくりした壮年期に入つたばかりの人、吃きつきつ々として多く語らず、東洋的なロマンチストらしい眼を伏せ勝ちにして居る。隻せつきやく脚——だがその不自由さも今はK氏の詩情や憂愁を自らいたわる生活形態と一致させたやや自己満足ていねんの諦念にまで落ちつけたかに見うけられる。けれども、矢張り逃避の世界が、K氏をめぐって漠然と感ぜられる。それで麻川氏の性格や好みがますますK氏に傾倒して行くことも察せられる。それからすこしつき合つて居るうちに、部厚なこつくりしたK氏の体格のどこかに落ちつきくさつたそして非常にデリケートな神経が根を保っている。麻川氏は自分の屹々きつきつした神経の尖端せんたんを傷めないK氏の外廓形態の感触に安心してK氏のなか味の

デリカな神経に触接し得る適宜さでK氏をますます愛好して居るのではあるまいか。

某日。——大川赫子が兄さんの大川氏と暫く別れ、近所に宿を極めてしばらく鎌倉に落ちつくのだそうだが、で、今日からK氏のモデルになり始めた。昼前から、麻川氏の部屋では大騒ぎだ。ああいう娘の存在は単調な避暑地の空気を澆刺とさせて呉れる。「荘ちゃん。」と娘に呼ばれて麻川氏も大はしゃぎだ。婆やお駒が私の部屋へ来て、芝生越の樹立ちの中の小亭を指して云う「大川さんが来る前は書き物をするからあすこへ閉じこもりおつしやと仰るので、ほかのお客を断わってお貸ししてありますのに、赫さんが来ると何も放り出してあの通り……。」と私達に遠慮し乍らな麻川氏のことを「口が旨い」とか、「男にしては如才なさすぎる。」とかこの婆さんかなりあら探しで感じが好く無いが、麻川氏にも多少云われる根拠がある。

赫子が麻川氏と相撲でもとり始めたらしいどたんばたんの音、東京から来た二三人の麻川氏訪問者も交つてわつわの騒ぎだ。それをこっちの部屋でじつと聞いて居た私には、やがて、麻川氏のはしゃぎばかりが別ものとなつて耳の底にひびいて来た。陰性を帯びたはしゃぎ方だ。上へ上へとはしゃぎ出そうとする氏の都会的な陽性を、どうしても底へ引き込む陰性なものがある。私の眼には一本の太い針金の幻覚が現われた……どたり、地面に

投げ出され乍ら、金属の表面ばかりが太陽にきらきら光っている……。

某日。——麻川氏と始めて少し文学論のような話をした。私が「どうも日本の自然主義がモーパッサンやフローベルから派生したものとすれば、私には異議があります。日本の自然主義は外国の自然主義作家の一部分しか真似てない気がします。モーパッサンにしろフローベルにしろ何も肉体的な自然主義ばかりを主張してませんね。私はむしろ精神的な詩的香気の方を外国の自然主義作家から感じるのですが。」麻川氏「そうですね、何しろ日本の作家達は西洋を真似るのに非常に性急です。それから、体力や精神力に全幅的な大きさが無い。従って一部分を概念的に真似るに過ぎないんですね。」氏は斯う云い終ると少し疲れたようにひるすぎの太陽のきらきらあたる庭芝を眺めた。向うの垣根の外に下駄の音がして長谷あたりへ来て居る麻川氏の知人達の声が聞えた。私は氏の部屋を辞して自分の部屋で暫くやすむ——幽けさや、昼寝枕にまつわる蚊——こんな「句」のようなものを詠んで麻川氏の寂し相な眼つきを想った。

某日。——麻川氏と私とは、体格、容貌、性質の或部分等は、全く反対だが、神経の密度や趣味、好尚等随分よく似た部分もある。氏も、それを感じて居るのか、いわゆるなかよしになり、しんみり語り合う機会が日増に多くなった。そして氏の良き一面はますます

す私に感じられて来るにも拘らず、何とも云えない不可解な氏が、追々私に現前して来る。それは良き一面の氏とは似てもつかない、そして或場合には両面全く聯絡を持たないもののようにさえ感じられる。幼稚とも意地悪とも、病的、盲者的、時としてはまた許しがたい無礼の徒とも云い切れない一面に逢う。

某日。——今日、麻川氏は終日榧の間の小亭で書いて居る様子だった。私達も一寸海岸へ行つて歸つて来ると主人は昼寝、従妹は縫物私は読書ばかりして暮らした。夕方、先日海岸で紹介されたT氏の弟が私の部屋へ遊びに来た。プロレタリア文学雑誌「種蒔く人」の同人で二十五歳、病弱な為めW大学中途退学の青年だが病身でも声が妙にかん高で元気に話す男だ。殆どわめく様にマルクスだとかレーニンだとか談論風発を続け、はては刻下の文壇をプチブル的、半死蛇等と罵り立てる。十時近い頃青年は病的なりに生々した顔付きで兄の家へ歸つて行つた。帰り際に青年は少しおどけた顔付きで「あ、しまった、お隣にやあアサ、ソウ（麻川莊之介の略称）が居たんだな。」と苦笑した。寝ようとして居る処へ母屋へ遊びに行つて居た従妹が歸つて来た。お駒婆さんも一緒だ。「あのね、麻川さんが、晩のお食事後、こっちにお客さんの居るうちじゅうお部屋の壁の外に椅子を運んでじつとして腰のかけづめでしたよ。こちらのこと、何か立ち聞でもしてたんじやあり

ませんか。」と告げ口する。主人は、「そうかい。」と云ったきりだった。私は告げ口した婆さんにも麻川氏にも何だか嫌な気持ちがしたが「あのお客さんあんまり大声で話しててたからね」と云ったあと、いくらか麻川氏に気の毒な感じもした。

某日。——朝早く主人は社用で大阪に発^たつて行つた。麻川氏の部屋の前を通ると、氏は例の非常に叮^{てい}寧^{ねい}なお辞儀をした。そして日屋の表門まで私と一緒に主人を送つて出て来た叮^{てい}寧^{ねい}な送別の辞を述べた。いつも乍ら好感の持てる氏の都会見らしい行儀の好い態度、そして朝風に黒^{くろ}上^{じょう}布^ふの単衣^{ひとえ}の裾^{すそ}が揺れる氏の長身を、怜^{れい}惻^{そく}に振りかざした鞭^{むち}のように私はうしろから見た。画家K氏は二三日前一たん東京へ帰り、早朝まだ一人の来客も麻川氏の部屋には無い。氏は私に寄つて行けと云う。氏の部屋の浅縁に腰かける。藤棚の藤^{ふじ}が莢^{さや}になつて朝風にゆらめくのを少し寝不足の眼で私がうつとりと眺めて入つて居ると麻川氏は私のずっと後の薄暗い床^{とこ}脇^{わき}に蹲^{そんきよ}居^ゐの恰^{かつこう}好^{すわ}で坐り込んだ。そして暫^{しばら}く黙つて居た。私も黙つていた。真白い犬が私の眼の前を通つた。犬は私の方を振り返り振り返り垣根の穴から出ていった。麻川氏は唸^{うな}るように太い声で後から私に云つた。「僕あですな。理智主義と云われる程、上昇しても居ません。また技巧派と片づけられる程墮落もして居ないつもりです……。」「あ、ゆんべの『種蒔^まく人』の云つたことですか。」私は直覺を言葉

に出して仕舞った。「種蒔く人。がどうだって構わないんです。僕だって、マルクスやレーニンに関心を持つことは敢て人後に落ちないつもりですから。僕あ、趣味としてはこことごく在来の日本人だけれど精神力のたくましさに於て、マルクスや、レーニンにむしろ同じるな。」「そうでしょうとも、あなたには、何処か精悍な歯があるわ。」「で、あなたは『種蒔く人』に何を話しましたか。」「私は大方聴いて居ただけですわ。大体まだ資本論さえ読んで居ないんですもの何とも云えません。ただね、実につまらないかもしれないことを一寸云ったのよ。いくら物質の平均が行われても人間の持つて生れた智能や、容貌の美醜の平均までは人為的制度でどうにもならないでしょう。かりに茲に二人の人間があり、一人は智能や美貌を持つて生れて来て居るが他の一人より物資を持たない。その時、他の一人は、前者のように智能や美貌は持たないが、物資に恵まれて居る為めにその不平はともかくも補われて居る。その時、その物資を後者から奪って前者との均等を行ったら、後者には智能や美貌は前者より持ち合わせない不公平ばかりが歴然と残る。ね。これをどうします。こんな意味の事を私『種蒔くさん』に聞きました。でも、返事がはつきり判りませんでしたわ。」「はは……ちよつと子供じみた質問だがそりゃあ真理ですな、たしかに、僕等にしても、やたらに物質の平等よばわりは同じ難いけれど、然し、茲に一

つの新らしい主義や人類の愛慾が発見され、それに向つて人心や時代が推移傾倒して行くことは、それが絶対真理であろうと、無かろうと、推移そのものに立派な理由があるのですから仕方が無いですな。たとえば、硯友社けんゆうしゃに反抗して起つた自然主義が、いくら平面的文学であり、その後に起つた耽美派文学たんびはがまた、単なる言葉の織物であるにしても、其処には推移そのものの真理が厳存するのだから仕方がない。「そう云つて氏は、いくらか体をのり出して来た。唇がすこし慄ふるえて不安らしい眼つきになった。「だが、今度の、マルクス文学擡頭たいとうの氣勢は前例のものより、かなり風勢が強いらしいですよ。」氏がだんだんいらだつて来るので何とか云わなければならぬ心配に私は迫られた。「あのね。ダンは天国篇より地獄篇を好く書いてますね。」私は何という突然なことを云い出したのか、自分でも呆あきれたが、麻川氏は意外にも素直に返事をした。「そうですね。由来、人類は極樂を理想とし乍ながら實際に於てむしろ地獄に懷き親しんで居る。ダンテといえども……。」氏は斯こう云い乍ら床の間の奥から今まで私の眼に見えない処へ転がしてあつたメロンを取出して来て、器用に皿へ載せナイフで割つた。そして齒を出して笑ひ乍ら、「われわれなんぞ、宜よろしく新時代に斯の如くぶち割らるべきです。ははは……。だが、」とまた云つて氏はメロンのなかからはみ出して来た種をナイフの尖さきでつつ突き乍ら「だがねえ、わ

れわれのなかにだつてこんな種がうじやうじやしてますよ。こいつがまた、地の底へもぐつて、いつの時代にか、もくもくと芽を出すでしょうから、厄介なものでさあ。」

白い犬が、何処からか歸つて來た。またのつそりと私の眼の先に立つて、私や麻川氏を見上げて居る。私はもう、だまつてメロンを喰^たべて居た。

某日。――裏木戸の外へ西瓜^{すいか}の皮を捨てに行くと、木戸の内側の砂利道に、無帽の麻川氏がうずくまり、向うむきで地べたをじつと見つめて居る。「何してらっしゃるのですか。」と足音をひそめて私が近寄ると、氏は極^{ごく}々あたりまえの顔をして「炎天の地下層にですな、小人がうじやうじや湧^わこうとしてるんじや無いですかな。」「え?」私はたらたら汗を流して居る氏を、不思議に見詰めた。「あはは……誰でもこんな錯覚が時々ありそうですね。」「……………」。「立ち上った氏の足下には大粒の黒蟻が沢山殺されて居た。汗で長髪を額にねばり付かせ、けらけら笑つて立つて居る氏に私は白昼の鬼氣を感じた。私は気味悪くなつた。」「西瓜がまだ半分ありますから、あとで召上りにいらっしゃい。」「私はそう云つて見たが、氏は返事もせずに井戸端をめぐつて、廊下へ昇つて行つて仕舞つた。夕方私の処へ來たP社の記者が私の部屋の一族と、麻川氏を交ぜて写真を撮つた。撮られて仕舞ってから氏は、近頃の自分がいかに写真面に陰慘に撮れる例が多いかということに非

常に気にし出した。で、もし麻川氏が陰惨にとれて居たら雑誌なんかに出すのはやめて欲しいと私もP社にたのんだ。P社の記者がそれを納得して東京へ帰ってから従妹いとこに昼の西瓜の半分を切らして私の部屋の縁で麻川氏をもてなす。「いやあ、よく御馳走ごちそうになりますな、お蔭で露命をつないでるようなもんですな。」わはと従妹がむき出しに笑い出した。氏「おかしいですか。」私「あなたのイットが面白いといつも云ってますの、このひとは。」けれど私はさつきまであんなに写真の事なんかで神経質だった氏が、打って替っておどけなんかを云うので従妹とは違った変なおかしさをおなかのなかで感じて居た。そこへ遠くの薄暮のなかから口笛が聞えて来た。T氏の弟がH屋の門を入れて来たのだ。すると麻川氏は「や、種蒔くが来た」と突然顔を硬直させて立ち上った。

某日。——夜ふけて母家へ時計を見に行くと、麻川氏が一人、応接間の籐椅子とういすに倚よつて新聞を読んで居た。私は、先刻東京から来たばかりの叔母さんと一緒なので、麻川氏に一礼して直ぐ部屋へ引返そうとすると麻川氏は無理に引とめて一つの椅子に私を坐らせた。叔母さんは小柄なので、ずっと離れて窓際のちつちやな椅子へ掛けて窓の外を見て居る。麻川氏「種蒔くはこの頃来ませんな。」私「ええ、東北の方へ行っちまったんだそうです。」麻川氏「ははあ、だが、今日も昨日も随分あなたん所でお客が多かったんですな。」

私「東京から距離が近いのに土地が珍らしいから用事がなくつても遊びに来るんでしょう、東京生活よりお客が多いくらいです。」麻川氏「お客の種類は大別してどんな人達ですか。」私「……………」。「麻川氏「いやあ、僕にひと様のお客を調べる権利はありませんが……。」私「重^{おも}だつた客は先^{せん}達^{だつ}てのX図案家や、詩人のX氏や、哲学科のX氏あたりでしょう。」麻川氏「図案家X氏も行きづまりの恰好ですな。」私「そう、今までのメカニズムが近頃擡頭して来た新古典主義に押され勝ちのようですね。そういう歐洲の情勢が日本にも影響して来ましたのね。」麻川氏「詩人X氏は相変らず若くてカラリストだ。だが、時々馬鹿に饒^{じょう}舌^{ぜつ}すぎますな……そして哲学科は……。」私「あれは私の論敵！」叔母さんが窓の方から、くるりとこつちを向いた。「煙草^{たばこ}いかがです。」と麻川氏は叔母さんにケースを出したが叔母さんは喫^のまないなのでお辞儀だけした。私「あなたの処も随分お客が多いんですね。」麻川氏「□奴も△奴もうるさい奴等ですよ。」私「でも随分あなた崇拜家ですわ。」「ははん。」と麻川氏はやや得意そうに電灯の笠を見た。真上から電灯の直射をうけて瘦^やせた麻川氏の両^{りょう}頬^ほへ一筋ずつ河のように太い隈^{くま}が現われた。麻川氏「ああいう狂拝家に逢^あつてはこつちから見てあぶなっかしくて困りますよ。□はさしもN市の大家産を傾け尽そうとして居るのですよ。好い奴ですが、どうも幼稚な野心家で

ね。文学だ、美術だ、でさらんぱらんになりそうですよ。」私「△さんの店の最中^{もなか}おいしいですね。」麻川氏「あの△氏も最中ばかりつくってりや好いのに、われわれどもを崇拜始めたら商売道は危うしですな。」私「×さん、×××さん達、先刻まで居られましたね。」麻川氏「×は小説家志望ですがダンスがうまいですよ。鎌倉ホテルのダンス場で×にダンス習ったらどうですか。年がいかないからまだ彼は無邪気ですよ。」叔母さんが口を出した。「いやですよ。この人は波乗りがやつとつて処ですからね、そんな身軽なことを出来やしませんよ。」お婆さんはだから発声運動をさせようと、三味線^{しやみせん}を持って来て、明日から私に鶴亀の復習をさせようとして居ることを話して二人は応接室から出ようとする。と麻川氏は改めて私を呼び留めた。そして大真面目^{おおまじめ}に「あなたとこへまだ随分沢山の人が東京から来るんでしょうな。およそ何人位まだ来る予定ですか。」私「それは判りません。」麻川氏「それらの人達がですな、一々僕を頭に置いて帰るんじゃないやあ、やり切れない……。」

暗い廊下を通り乍^{なが}ら叔母さんは云った。「変な人ね、あの麻川さんて人は。」私「……。」叔母さん「何だって人の処へ来るお客の数を調べ上げたり気にしたりするんだらうね。」

部屋へ帰つて来て床を敷き乍らも叔母さんは独ひとりごと言のように云っている。「どうも変だよ、あの人はまるで、うしろ暗い事でも持つているようだ。」などと。叔母さんは五十近くでなりふりなど古風で常識的だが、なまなかの若者より敏感なのだ。やがて叔母さんは襖ふすまをしめて従妹いとこと向うの部屋で寝て仕舞った。私は昼寝をかなりしたし、叔母さんの言葉や、麻川氏の今さっきの言葉や態度も気になつて寝られ無い。仕方なしに起きて机の上に両手を組み頭をのせ叔母さんの云つた麻川さんのうしろ暗い事について考え込んだ。うしろ暗い事なんか誰でも持つて居るのだ、それをあんなにも人に見せまい感づかれまいとする麻川氏の焦燥は、見て居てもこつちが辛い。お客はお互いの部屋のお互いつこなのだ。も一つの部屋のブルジョア息子達の部屋のお客こそ大したものだ。朝から晩まで誰かしら外部のものが詰めかけ、ハモニカ、合唱、角力すもう、哄笑こうしょう。それらは麻川氏の神経に触らなくて「種蒔まく氏」の外は殆ど皆おとなしく話し込んだり遊んだりして帰って行く私の客達に麻川氏是一種の恐怖観念のようなものを抱くのらしい。麻川氏の方にしても若い無邪気な×氏や温厚な洗鍊された作家××氏や画家K氏を除く外はあんまり愉快な客ばかりでは無い。或る一人の男などはたまたま廊下で私に逢あい私を呼び留めて「僕あ身分をかくして居るんですが。」などと思わせぶりな前提で麻川氏を誇張的に讃美さんびし自分も麻川氏の

客であるからには、天下の存在であるかのような口吻を洩らして私に堪らなく気障な思いをさせ、また相当いくつきらしい女客達が麻川氏を囲んで大柄に坐すわりこみ、麻川氏の座敷から廊下や庭を往き来する人達を睥睨へいげいするのも愉快では無い。私などそんな女達や陰口の上手な麻川氏等に何を云われて居るのかと時々たまらなく神経に触る。なるだけ麻川氏の部屋に客の居るとき、私は自分の存在を隠して遠慮して居る。客の居ないときの麻川氏と談す時は、麻川氏の客のことなど殆ど忘れて仕舞つて居るのに、麻川氏は、氏と何の関係も無い私の客達に、ああも神経質になるのは、叔母さんのいわゆる「何かうしろ暗さ」。を私に感じて居、それを私が客達に或いは幾分でも談すと思つて居るのかしら。それにしても麻川氏が私に「うしろ暗さ。」を懸念するような事は差し当り何だろう。強て想おもい出そうとすれば一週間ばかり前の「美人問答。」の折の氏の執拗しつようさだ。氏が自分から私に押したあの時の執拗さに反発され、それが氏に創痕きずを残していることが想像される。

一週間ばかり前のひるすぎ、麻川氏と私の話は「女性美。」というような方へ触れて行つた。麻川氏「女の本当の美人なんてものは、男と同じように仲々すくな醜いですね。しかし、男が、ふと或る女を想いつめ、その女にいろいろな空想や希望を積み重ねて行くとその女が絶世の美人に見えるようになって来ますね。そして、その陶醉を醒さましたくないと思いま

すね。その方が男にとって幸福ですからね。女から紅や、白粉おしろいを拭ぬぐい取って、素顔を見
るなんか私にはとても出来ない事です。だが、それだって好いじゃないですか。それだっ
て。」氏の言葉の調子は、いくらかずつ私をきめつけてかかる。私は「そうですとも。」
と相槌あいづちを打った。すると麻川氏は「ほんとうにそう、思うんですか。」とますます私を
極め付ける。私「ええ。」麻川氏「本当に……じゃあ何故あなたは……何故……。」「何
ですか」と私。

麻川氏は、それきり口をつぐんで仕舞った。眼が薄ぐもりの河の底のように光り、口辺
に皮肉な微笑が浮んだ。やがて氏は眼を斜視にして藤棚の一方を見詰めて居たが突然立ち
上り手を延ばして藤の葉を二三枚むしり取り、元の処へ坐った。が、いらいらとしていく
らか氣息を呑みの、「僕が、そういう意味ですすね、僕がある女を美人と認めるとしても異
議無しの筈はずですがねあなたは。」私「ある女って誰ですか。」私も咄嗟とつさの場合、詰きつとなつ
た。麻川氏は必死な狡さずるで「ふふふふ。」と笑った。ふと、私はX夫人の事を思いついた。
そして、巧たくみな化粧で変貌へんぼうしたX夫人を先年某料亭で見て変貌以前を知って居る私が眼前
のX夫人の美に見惚みほれ乍ら麻川氏と一緒に単純に讃さんたん嘆出来なかつた事、その気持ちでそ
の時の麻川氏を批判した随筆を或る雑誌に絶対に氏やX夫人の名前を明記しないで書いた

のが、矢張り麻川氏は読んで感付き気持ちに含んで居たのだと判った。「私は、自分の美人観はかなりはつきり持つて居ますけれどひと様の好悪はどうでも好いんです。」私は斯う云つて何故か悲しくなつてうつ向いて仕舞つた。何というしつこい氏の神経だ。正午前から、あんなに女中に言伝て、お駒婆さんに菓子を持たせ、部屋へ話しに来るように私を呼び立てたのは、この事を云う為だったのか、もうこのくらいつき合えば、この事を云い出しても好いと、見はからつての氏の招待だったか……その二三日前もこんな事があつた。私が海岸から扇ヶ谷^{おうぎやつ}へ向う道で非常な馬上美人に遇つたと歸つて来て氏に話した。すると氏は妙な冷笑を浮べて「非常な美人？ ははあ、あなたに美人の定見がありますか。」私「でも、私は美人と思つたのですもの、定見とか何とか問題無しに。」麻川氏「その女が馬上に居たんで美人に見えたんでしよう。」私にもぐつと来る気持ちが起きたが表面は素直に「馬上だからなおスタイルが颯爽^{さつそう}としてたんでもありませんがね、私の云うのは顔なんですよ、素晴しく均整のとれてる顔が、馬上でほんと赧^{あか}らんでいましたの。」「はあ。」と麻川氏はどうも遺憾で堪^{たま}らない様子だ。「由来均整のとれてる顔には莫迦^{ばか}が多いですな。」

私はむつとして傍を向いた。何故私が扇ヶ谷の道路で観^みた馬上の女性を麻川氏の前で美

人と云つたのは悪いのか。そのくせ、麻川氏自身は殆ど絶えず色々な女性の美醜を評価し続けて居ると云つても好いくらいだのに何故私がたまたま扇ヶ谷の馬上美人を氏の前で褒めては悪いのか。事実私としては白日の下で近來あれ程高貴で美麗な顔立ちを見たことが無いのだ。

麻川氏は私のむつとした顔色を覷てとつた。するとたちまち臆病らしくおどおどして茶を汲んで私の前に置いてとつつけたように云つた。「多分素晴らしく美人だったのでしような。その美人は。」私はおとなしく笑つちまつた。「ええ、有がとう。」私は何が有がとうと云つたのだろう。そのくせ胸は口惜しさで一ぱいなのに……。

私はそれから、精々麻川氏にもてなされて氏はやつぱり気の弱い好人物なのだ、と心の一部分では思い乍ら部屋へ歸つた。だが、口惜しさは止らない。従妹達には昼寝の振して背中を向け横になった。そしてひそかに出て来る涙を抑えた。私も頑愚で人に自分の思うことを曲げられないあつかい難い女かも知れない。しかし、麻川氏の神経はあんまりうるさい。これではまるで、鎌倉へ麻川氏の意地張りの對手に来て居るようなものじゃないか……。

従妹がうしろで云つた。「お姉様。麻川さんと何か喧嘩していらしたのでしょうか。」

あとは従妹の独語的に「ほんとにさ、多田さん（嘗て私を変態的に小説に書いて死んで行った病詩人）麻川さんと云い、文士なんて、なんてうざうざと面倒くさい人達なんだろう。」この實際家で、しつかり者の従妹の云い草が、あんまりユーモリスチックなんで、私は、くるつと体を向き変え声を立てて笑つて云つた。「そして、このお姉様も、およそ面倒くさい、うざうざじゃないかねえ。」「ふふん、仕方が無い、さ。」従妹はぱたん、と棕櫚バタキで蠅を叩いた。

一しきり昼寝して起きて従妹に羊羹を切らせ、おやつにして居ると、障子の外で、ことん、ことん、廊下を踏む足音がする。「どなた？」と従妹が立つて行く先に障子を細目に開けたのは麻川氏だった。「やあ、お茶ですか、また来ましょう。」私は先刻の事などひと寝入りして忘れて仕舞つたあとなので「いいえおはいり下さい。藤村の羊羹が東京から届きましたの。」愛想よく麻川氏に座蒲団をすすめた。氏は片手に紙挟みのようなものを持つてはいつて来た。私達のすすめる羊羹を、「うまいですな。」と一切喰べた。そして何か落ちつかない様子で、まじまじ襖や床の間を見て居たが、やがて紙挟みを私の前へ出して、「これ御覧になりませんか。」私「何ですか。」麻川氏「ブックの間から偶然出て来たんですよ。」

私は何気なく氏の手から受け取って見ればそれは一枚のオフセット版でチントレットの裸婦像だった。艶消しつやけの珠玉のような、なまめかしい崇高美に、私は一眼で魅了されて仕舞った。従妹も伸び上のびあって私の手許てもとの画面に見入った。そして、「まあ。」と嘆声たんせいをもらった。「ははあ、讚嘆さんたんして居られますな。」と麻川氏はめったに談しかけない従妹へ言葉をかけなかなか画面から眼を離さない私達を満足気に見守って居たが、私が画を氏に返すと、氏は待ち受けたように云い出した。「然ししかですな、僕等がこの大正時代に於て斯こうまで讚嘆するこの裸婦の美をですな、我国古代の紳士淑女達——たとえば素盞すさのおのみこと鳴尊、藤原鎌足、平将門、清少納言、達が果して同等に驚嘆するかですな、或いはナポレオンが、ヘンリー八世が、クロンブスが、クレオパトラが、南洋の土人達がですな、果して、今の我々と同様に評価するかどうかですな……。」

氏の言葉を茲こゝまで聞いて私は、氏がチントレットの画像を私の部屋に見せに來た意味がほぼ判った。氏は、先刻私と云い合つた美人の評価の結論を氏の思わく通りに片付け度たくつてチントレットの裸婦像をその材料に使う為め、私の部屋まで出かけて來て、殆どほとんその効果を収め得たのだ。私は胸にぐつとつかえるものが出來て氏の言葉を聞き乍ら氏の手へ返つたオフセット版をじつと見詰めて居た眼を動かさなかつた。氏の敏感はすぐその私に

気がついたらしく流石さすがに黙つて立ち上った氏の顔を私が視たとき私はたしかに氏の顔に「自己満足の創痕そうい。」を見た。私はあの時の氏の「自己満足の創痕。」に氏の性格の悲劇性をまざまざ感じたのを今もはつきり覚えて居る。

叔母さんのいわゆる「うしろ暗さ」をさしあたり麻川氏に探せば以上のような先日中からのいきさつのいろいろが想い出される。だが、氏が「自己満足の創痕。」のためにやや蹢躅そつろつとして居る始末までをなお私が氏からこの上負わされるのはやり切れない。

某日。——氏の部屋には大勢の氏の崇拜客が殆ど終日居並んでいた。氏は客達の環中に悠然と坐すわつて居ると殆ど大人君子のような立ち優まさつた風格に見える。あれを個人と対談してひどく神経的になる時の女々しく執拗しつような氏に較くらべると実に格段の相違がある。それにしても或る人が或る人を云うのに、「自分はあの人に何年つき合つて居る。」などとその人を知悉ちしつして居るように云うのを聞くが、私には首肯出来ない。一昼夜のうちに或る一定時間に主客として逢あつたとて要するにそれはその人にとって置きの対人的時間を選んで逢つたものに過ぎない。どんなに碎けて応対してもそれはその人のとつて置きの時間内での知己である。麻川氏のような見栄坊みえぼうな性格の人はなおさら、どんな親しい友人間としても全部の武装を解除しては逢つて居まい。たとえ短時日でも隣人として朝夕の不用意のうち

にその人の多方面を見ることは、主客、友人として特定時間内に何年逢つて居るよりも何程か多くその人の表裏全幅を知悉し得ると云えよう。私はもはや二十日以上も、麻川氏と壁一重を隔てたばかりの生活を過した。私は、通常の客や友人同志の知らない「不用意の氏」を随分観^みた。或る朝、氏が帯の端を垂らしてだらしなく廊下を歩いて便所に行く後姿、誰も居ない洗面所の鏡の前へ停つて舌を出したり額を撫^なでたり、はては、にやにや笑い、べっかつこをした顔を写し、それを誰も知らないつもりで済まし返つて部屋へ引つ込んで行つた氏。またある日の午後、盥^{たらひ}の金魚をたつた一人でそつと覗^{のぞ}いて居た氏。ひっそりと独りの部屋で爪^{つめ}を切つて居た氏。黙つて壁に向つて膝^{ひざ}を抱いて居た氏。夜陰窓下の庭で上半身の着衣を脱いでしきりに体操をして居た氏。ふと、創作の机から上げた氏の顔が平生の美貌^{びぼう}と違つた長いよれの顔で、気味悪いグロテスクな表情を呈して居た。これらは、他人に向つて一種のポーズをつくり、文学だの美術だのを談つて居る氏よりも、どれほど無邪気で懐しく、人間的な憂愁や寂寞^{せきぼく}のニュアンスを氏から分泌しているかも知れないのだ。私が氏の為めに、随分腹立たしい不愉快な思いをし乍ら、いつかまた好感を持ち返すのは、ふとした折に以上のような氏の人知れない表情に触れるともなく触れるからかも知れないのだ。

某日。——蒸暑い風が、海の方から吹き続けて来て、部屋には居たたまれない夜だ。叔母さんは、お駒婆さんと親しくなつて、町へ一緒に買物に行った。私は、たまつた手紙を書き終え九時頃従妹と庭の涼み台に出た。其処にたつた一人麻川氏が居た。星の多い夜だ。私達は話し乍ら星を仰ぎ勝ちだつた。「僕、さつき、一寸おもい付いたんだが、あなたにこんな歌がありませんでしたか……大都市東京の憂愁を集めて流す為めか灰色に流れる隅田川は……とかいうの。」私「ええ。ずっと子供のうち下町の生活を暫くしてましたの。その時期にあの辺の都会的憂愁が身にしみたんですの。」麻川氏「あなたは太たい憂愁家ですね。つき合つて僕は気がひきしまる。それに坂本さんもあんなに好人だし、僕鎌倉へ来て好かつたかな。」私「けむたがられたことも私達ありましたのね。」麻川氏「あははは……。」私「でもよく私達の隣へ越していらつしやいましたわ。」麻川氏「でも、僕の方が先へ借りてたんだもの……それに僕は気が変り易いから。」従妹が突然太い声を出して「私ね東京つて云えば直ぐに青山御所を思い出すつきりよ。」と云つたので話はまたあとへ戻つた。麻川氏「あはは……それも単純で好いな……僕なんか本所育ちで、本所の大どぶに浮いた泡のようなもんですよ。」従妹「あらいやだ。」麻川氏「そうですよ、ああそうですとも（私に向いて）どうもね、直きぶくぶくと消えて行きそうですよ。」私

「星を見乍らそんなことを考えていらつしたんですか。」麻川氏「要するに、こんないかげんな世の中に、^{はか}儚ない生死の約束なんか支配されて、人間なんか下らないみじめな生物なんだ。物質の分配がどうだの、理想がどうだの、何イズムだのと陰に陽にお祭り騒ぎして居るけれど、人間なんて、本当の処は桶^{おけ}の底のウジのようにうごめき暮らして居る惨^{みじめ}な生物に過ぎないんですな。」私「そうですね。でも、そういう風に思い詰めるどんづまりに、また反撥^{はんぱつしん}心も起つて、お祭騒ぎや、主義や理想も立て度^たくなるんじゃないのですか。どっちも人間の本当のところじゃありませんか。」氏「生死の問題に就^ついてあなたは何う思いますか。」私「死は生の或る時期からの変態で、生は死の或る時期以前の変態というようにも考えるし、また、まるまる別個のようにも考えますわ。」氏「というと、生死一如でもあり、また全々生死は聯絡^{れんらく}のないものとも考えるんですな。」私「ええ。」氏「願くばどっちかに片づけ度いもんですね。」私「仕方が無いからさしあたりどちらか私達をより以上に強く支配する觀念の方へ就くんですね。」氏「僕は生死一如とは考えない。死はどこまでも生の壊滅後に来る暗黒世界だと、觀念の眼を閉じて居るけれど、たつた一つ残す自分の仕事によつて、死後の自分と、現在との聯絡はとれるものだと思つてますな。」私「私もそう考えたことがありました。しかし、今は、かなり違つて来ました。」

私達の肉体に籠^{こも}るエネルギーは死によって物質的に変化し宇宙間の実在要素としてこの宇宙以外一步も去らずに残るかもしれませんが、それ以上の個性とか、精神とか、つまり現象的な存在は全々消失して仕舞うから生存中の自己の現象的な産物の仕事なんかは、死後に全々消失する個性的な自己というものに、何の関係もありはしない……あると思うのは、あとのこの世に残った人達の観察に過ぎないでしょう……。」「氏「一寸待^{ちよつと}つて下さい、あなたはそんな風に考えて淋しいとは思いませんか。少くとも、あなたのような感情家が。」「私「淋しいと思い、そして私が感情家だから、なおそんな処まで考え抜いちまったんですよ。」「氏「判りました。あなたが怒りんぼうのくせに、じき優しくなるのも、そんな思考の曲折や、性格の変化があなたにあるからですな。」「私「そうでしょうか。私なんか煩惱^{ぼんのう}だらけで、とても、ものごとを単純に考えて、晏^{あんじよ}如として居られないんです。そのくせ性格の半面は、とても単純でのん気千万のくせに。」「すると従妹^{いとこ}が突然「それが好いわよ。」「と妙なしめくくりをつけたので、私はちぐはぐな気持ちになって黙って仕舞った。麻川氏は私達の側から立って今一つあいている長方形の涼み台の上に仰向^{あむむ}けになった。八月下旬に近く、虫がしんとした遠近の草むらで啼^ないている。麻川氏の端正な顔が星明りのなかでデスマスクの様に寂然と見える。ひよつとしたら、尖^{とが}った鼻先から氏の体が、見

る見る白骨に化して行くのでは無いかと思われてぞっとした。そして、私のそのかすかな身ぶるいのなかを氏の作品の「羅生門」の凄惨せいさんや「地獄変」の怪美や「奉教人の死」の幻想が逸早く横切った。私はそれ等諸作の追憶から湧き上る氏への崇拜の心を籠めて、「とにかくお体を大切になさいまし。」と平常ならば恥かしいような改まった口調で云った。先年主人が戯画に描いて氏を不愉快にしたのも其処から文学世界の記者川田氏が材料を持つて来たのであるが、その後も氏が支那旅行から持ち越した病気が氏をなやませ続けている噂もまんざら嘘では無いらしい。氏は時々自分の長髪を掻きむしる。そして一二本の毛を指に摘んで自分の眼に寄せて見る癖が出来て居るらしい。私もたしか一二度その癖を見たような覚えがあり、今夜のように氏に対する崇拜心から愛惜の心が昂ぶって来ると、しみじみ氏の健康について云って見度い気になるのであった。

某日。——まだみんなが寝て居るうち、日屋の門を抜け出て、一人で朝の散歩に出た。自分乍ら、こんなことは珍らしいと思ひ乍ら、唐黍畑の傍を歩いて居ると停車場の方から、麻川氏がこつちへ歩いて来る。黒っぽい縞の羽織の着流し姿で小さいケースを携げて居る。真新らしい夏帽子も他所行らしく光っている。私に近づいた氏は、「やあ。」と咽喉のどに引き込んだような声で笑って、「僕、東京へ行つて来ました。昨夜、おそく思い立

つたんで御挨拶ごあいさつもしないで出かけましたが。」私「そして、こんなに早くお宅を出ていらしたんですか。」氏は一寸まごついたような様子だったが「いや、家へ帰りませんでした。Xステーションホテルに泊りました。」私「そして、直ぐ引返していらしたんですか。」氏「あんまり遅く家の者共を、驚かしてはいけないと思って、昨夜はホテルへ泊り、今日あっちこっちの本屋へ行つて金でも集めて、一たん家へ歸つてからまたこっちへ来ようと思つたんですけど、今朝起きたら面倒になつちまつて万事放ほうてき擲して来ちまいました。」私「お宅では、皆さん待つていらつしやるんでしょう。」氏「家なんて面倒くさいもんです。」私「でも、好い奥様や、お子様がいらつしやるのに。」私は、われ乍ら、月並な事を云つたものだと思つた。氏「あなたは結婚だとか、家庭を、どう思いますか。僕は少なくとも結婚なんて、悪遺伝の継続機関だと思つて居る。仮りにすな。僕が祖母或いは父母の悪遺伝を継続して居る者とする……云うまでもなくそれは僕の子に孫に、或いはその孫に……。」氏はここまで云つて口をつぐんで仕舞つた。私は氏の実母が癡狂者であることを、ひそかに知つて居たので、肅然として氏の言葉を聞いた。だが、それを口に出すのは気の毒なのでさあらぬ体に言つた。「そんなに考え過ぎても奥様やお子さんがお可哀相かわいそうね。」氏「そりや、そうです。だから僕は、こんな事考え乍ら出来るだけ妻

に対しては好い夫、子にも好い父であろうとして居ます。でもそういう責任や羈絆きはんを感じれば感ずる程また一方に家庭への反逆心も起ろうというもんです。はははは……人間なんて、殊に男なんて勝手なもんですな。」

氏の笑い声が、はたはたと、八月の海岸地の繁茂する野菜畑に響き渡った。氏が妙に空虚に張った声の内容には、何か韜晦とうかいする感情が、潜んでいるようにも感ぜられた。ことによつたら氏は家庭へ帰る代りに誰かに昨夜ひそかに逢あつて来たのでは無いかしら……誰かに……或いは彼女……X夫人に……。

某日。——昨夜、おばさん三昧しやみせん線せんを持つて東京へ帰り（私に唄うたをうたわせ発声運動の目的で来たが私が避暑地の人達に聞かれるのを嫌がるので、）主人今朝大阪より此処へ戻る。夜汽車の疲れを見せて日屋の表門を主人がはいるや、麻川氏はいそいそ出迎えて呉くれる。私達の部屋より表門に近い氏の部屋へ氏は主人をまず招じて座布団ざぶとんをすすめ、洗面器へ冷水を汲み、新しいタオルを添えるなど、この氣の利かない私よりもずっと行き届いた款待かんだいぶ振りである。そういう場合氏の互わりの長い手足は、中年の良妻のような自由性と洗鍊を見せて働く。こういう折々、いつも私は思うのであるが、これは氏の天資か、幼時からの都会の良家的「お仕込み」で、習性となつて居る氏の動作が、このほか松葉杖つく

画家K氏を、まめまめしく面倒見る氏の様子を、何事の美拳ぞと、私は眺めたことも度々あった。主人も好もしそうに微笑して氏にもてなされて居る。両優ふくんのような初対面の挨拶に代つて、今や私達は真に打ち融け合つた一家族の如き団欒^{だんらん}をなす。

某日。——大阪から主人が戻つて五六日たつた今日の午前十時頃、H屋の門前に一台の古馬車が止つた。これは鎌倉でも海岸に遠い場所から海岸へ出る人のために備えられている雇い馬車であるらしい。私は確実には知らないが、何処かの貸馬車置場にでも納まつているものらしい。鎌倉の街を歩いて居て曾て^{かつ}こんな馬車に逢わなかつたのを見ると、余程特種な計画的な場合の人にのみこれは雇われるものらしい。それを麻川氏の部屋で頼んだものだ。私が、麻川氏の部屋と敢えて書くのは、この頃の麻川氏の部屋は、大川赫子によつて殆ど^{ほとん}領されて居る形であつて最もよく混成された麻川氏と赫子の意志が、麻川氏の部屋の意志と呼んで好いような気さえする。私は平常、他の客の時は避けて、出来るだけ麻川氏の室に行かなかつたが、赫子は夜自分の宿に帰つて行くほかは、殆ど麻川氏の部屋に居続けなので自然、避けてばかりも居られないので、私が赫子に接触する機会が此頃多くなつたわけである。それに馴^なれると赫子は庭続きに私の部屋の前縁にも時々遊びに來た。

赫子と麻川氏は馬車で海岸に行くことを、何故か性急に私達の部屋へ來て勧めて止まな

い。私はやや唐突に感じ、少し迷惑にも思つた。それに昨夜来徹夜の仕事に疲れてこれから寝に就^つこうとする主人をも急^せき立てて連れ出そうとするのでなおさら迷惑の度を増したが、とにかく隣人の交際として行くことにした。道々も漠然として居る私達側に引き換え、何か非常に海岸に目指すもののある期待に赫子も麻川氏も弾んで居るらしく見える。長谷^{はせ}の海岸に着いた。一しきり人出の減つた海は何処か空の一隅の薄曇りの影さえ濃やかな波の一つ一つの陰に畳んでしつとりと穏かだった。だが、私は何かその静穏な海の状態に陰險な打ち潜んだ気配を感じて、やや憎みさえ覺えた。今日は海へはいり度^たく無いな、と思つた。(はいつたとて私はどうせろくに泳げないのだけれど)徹夜の仕事を続け睡眠不足に疲労した主人はなお入れ度くないと思つた。

赫子は私のそんな思わくなどに頓^{とん}着^{ちやく}なく、ずんずん私を促し立てて私を婦人更衣場へ連れ込んだ。同様に男子更衣場へは麻川氏が主人を連れて行つた。私は赫子の裸を始めて見た——真白だ。馬鈴薯の皮を剥^むいた白さだ。何という簡単な白さ。魅力の無い白さ。私は茲^{ここ}でも赫子に一つ失望した。茲でもというのは、私は大分以前から赫子に失望し始めて居たからであつた。何故、一々、失望するほど、赫子に注意を私は払うのか。赫子の義兄大川宗三郎氏の陰影の深い耽^{たん}美^び的^{てき}作品に傾倒して居た私が大川氏の愛^{あい}玩^{がん}すると評判

高い赫子に多くの価値を置こうとするからだ。始め私は磨きの好い靴の先や洋装の裾すそのひらめきや、ずばずばしたもの云いに赫子を快活なフラツパーな文化的モダンガールだと思つて好奇心を持つた。だが、それらの表面的なものに馴れて、珍らしさを感じなくなつた中頃から、私は赫子を、平凡で常識的な世帯持ちの好い街のおかみさんのようなたちの女であることが判つた。彼女の人前でする一見奇抜相ないろいろな言動の中に実は何もかも、打算して振舞つて居る分別がまざまざ見えすいて来た。この女は大川氏の獵奇癖に知つてか或いは知らずにかいつの間にか乗つて仕舞つて、その表皮がいつか奇矯に偽造され、文壇の見せ物になつて居るに過ぎない。赫子は好い旦那だんなさんを早く見付けて好いおかみさんになりなさい。と私の好奇心は失望し乍ながらも私の女性としての実質が好意をもつて心ひそかに赫子にそう云つて居た。処がまた追々日がたつに従つて私は赫子がやはりありきたりの女性の誰でもと同じように一寸ちよつとした言葉の間の負けず気や周囲の同性の身なりのほんのつまらない動静にまで皮肉や陰口で意地悪くこせこせするのを見聞するようになり、もはや赫子という女に全然興味を無くして仕舞つて居た。だが、着物にかくれていた赫子の肉体的魅力に私はまださほどの不信を持つて居なかつたのだけれど……。

海水着一つになつた赫子は、例の虚勢を声に張り上げて、海へ飛び込んだ。水泳もひど

く得意のように話して居たが、これもまた甚だ平凡な泳ぎ方だ。それでもかなり達者に一丁程麻川氏と並んで岸を離れて行つた。私は二人の遠ざかったのを見て主人の傍へ行つた。「半月程まえ茲の海で心臓麻痺しんぞうまひを起して死んだ人があるんですって。」私がこういう真意を主人は知つて居た。若いうちの深酒で主人は心臓を弱くして居る。水泳は、ずっと前から自分でも禁じて居る。今日にかぎつて泳ぐわけも無いのだが赫子も麻川氏も先刻からむしろ主人を先頭に泳がせ度い気配けはいが見える。それにもかかわらず、主人は岸近くで私と一緒にわずかに波乗り位して居るだけだった。「おうい」と赫子はかなりの高波の間から手招ぎをした。少し離れた処で麻川氏も「泳ぎませんか坂本さん。」赫子「駄目、泳がなくては、坂本さん。」赫子は当然自分達に続いて泳いで来るべき筈はずの坂本が岸に居るのが不本意だともいうような様子である。「僕あ駄目。」と主人が手を振ると「駄目つてこと無いわよ。」と赫子。「泳ぎましょう、行きましょうよ、沖へ。」と麻川氏。「いらつしやい。」「いらつしやいつたら。」といよいよ異常な熱心で主人を誘致しようとする二人。それでも主人は笑つて居て岸から離れようとはしない。誘い疲れて断念した赫子と麻川氏は誘うのを止めて、ほんの一廻りひとまわその辺を泳いだけで直ぐ岸へ歸つて来た。「どうしても泳ぎませんかね、坂本さん。」と二人はまだ執拗しつように主人に云うので「ああ、

今日は嫌だ。」と主人も少しむつとしたように云った。麻川氏はさも失望したように、

「駄目だなあ、折角誘つて来たのに。」赫子はもうすっかり不機嫌を顔に出して「ふん。」

と横向いたなり、さつさと更衣場の方へ足を向けた。「君達、僕に構わずにゆつくり泳い

だら好いじゃ無いか。」主人が云うと麻川氏は「つまらないからもう帰りましょう。」と

矢張り麻川氏もさつさと更衣場の方へ行つて仕舞った。従妹一人は無頓着に独りで、あち

こち波を掻き廻して居たが、あんまり早い一行の帰り仕度に吃驚して波から上つて来た。

馬車が待たせてあつた。長谷からH屋まで電車もある。平生は誰でも電車へ乗る。それを

帰りの馬車まで待たせてある。私は、いよいよ何事かの計劃のもとに今日の「海水浴場

行」が企てられたものと直覺した。丁度、主人は更衣場の傍でA社のK部長に逢い、K氏

の別荘へ来て居るT氏に逢う為め同行したので私は従妹と一緒にすすま無い馬車の同乗を

して赫子や麻川氏と帰途に就いた。果して一丁程馬車が動くと赫子が口を歪め、私には顔

の側方に向け、而も一番私に云う強い語気で「ふん、あれでも神伝流の免許皆伝か。」麻

川氏「くどく云うなよ。」赫子「だつてとうとう瞞されちゃった。」私は判った。昨日の

午後、水泳の話が麻川氏の部屋で出たその時、私と赫子との説が何かで一寸行き違つた。

思ひ上つていつも座中の最得位を占めて居なければならぬ赫子が面白く無さそうな顔付

きだった。そのあとの話の都合で私は主人が少年時代隅田川の河童党で神伝流の免許を受けて居ることを云った。だが、それをまた何のために馬車まで雇って実験する必要があるのだろう。たとえば今日泳がなくても主人の免許を受けたことは飽迄も事実であるのに、浅はかな人達よ。何とも思うが好い。と私はぐっと、息を詰めて堪えて居た。赫子は、云うだけは云ったが、折角の計画が無になつたいまいましてさを紛らす為めか傍若無人にたてつづけの鼻唄。麻川氏は私と同じ無言で、しかし、何かしきりに考えめぐらして居る様子だったが、突然、私の紹縮緬の単衣の袖を撮んで「X女史にこんな模様は似合うな。」（X女史はX夫人だ、氏は自分とX夫人と世間が噂をして居るのを知らないらしい。）と決定的に云った。私は話題が変つたので先刻からの不愉快な気持ちが一寸くつろいで「あの方には無地でこの色（小豆色）だけなのが好いでしょうね。」と云った。すると麻川氏の顔に見る見る冷笑が湧いた。「あなたの主張はそうですね——あなた、あの人の衣裳持ちにヤキモチ焼いて居ませんか。」終りの一句（これは普通の目鼻を持つて居る同志が面と向つて云い合う言葉では無い。氏は氣違いじゃないかな。と私は咄嗟の場合思つた）は、私、従妹、をむしろ吃驚させて氏の顔に眼を集めさせた。処が、以外にも氏の顔には、今が今、自分の口から出た言葉に吃驚し狼狽して居る色が私達の吃驚以

上に認められた。

H屋の部屋へ帰っても私は、石でも喰^くつたように黙りこくつて、従妹^{いとこ}にさえ口を利く氣持になれなかつた。主人が間もなくあとから歸つて来て「麻川君があすこんとこ（私達の部屋と氏の部屋との境いの露地。）へ籐椅子^{とういす}を持って来て腰かけてたよ。」と何気なく話したので従妹は急に勢い込んで歸りの馬車の情況を主人に話し「あの人、自分が大変なこ
と云っちゃつたので私達が部屋でどんなに怒つて話し合つてるか聞き耳たててたんでし
う。あの人よく立ち聞きする人ですもの。ヤキモチと云えばあの人こそ……いつかお姉様
が、久野さんや喜久井さんのこと麻川さんの前で褒めたら、それはそれは不愉快な顔して
喜久井さんや久野さんの悪口随分云つたじや無いの、あの人こそヤキモチヤキだわ。」私
もそれに思い当つた。が従妹があまりはきはき云つて仕舞つたので、氣持がいくらか晴れ
たせいか、不思議と心の底の方から麻川氏への理解がほのかに湧^わいて来た。「そのくせ、
充分友達思いなんだけどね。」すると主人が例のゆつくりした調子で云つた。「そうだよ。
ああいう性分なんだよ。ふだん冷静に見せてるけど時々末梢^{まつしょう}神經^{しんけい}でひねくれるのさ。
君にだつて悪意があるわけじや無いんだけど……。」従妹「そうよ。あの人お姉様ととて
もお話も合うし仲よしなんだけど、赫子^{こくし}なんかに取り込められるとふとその氣になるんだ

わ。」私もほぼ判つては居るのだけれど今頃になつて涙が出て仕方がない。主人「とにかくあの人の神経にや君が噛み切れないんだよ。そうかつて君つて人にはどうも無関心になり切れないらしいな。ああいった性分の人には……それで焦れてついいろんなことを云つたり仕たりしちまうんだな。」

この時、途中、馬車から自分の宿へ降りて行つた赫子がまた麻川氏の部屋へ来たらしい高声が聞えた。従妹が一寸顔色を変えたのを主人は眼で制した。そして煙草に火をつけてから云つた。「どうだい。一たん東京へ引き上げちゃあ。そして九月になつてみんな帰つちまつてからまた来るとしちや。」

葉子はこの日記の終つた大正十二年八月下旬以来、昭和二年春まで、足かけ五年も麻川莊之介氏に逢わなかつた。昭和二年の早春、葉子は、一寸した病後の氣持で、熱海の梅林が見度くなり、良人と、新橋駅から汽車に乗つた。すると真向いのシートからつと立ち上つて「やあ！」と懷しげに声を掛けたのは麻川莊之介氏であつた。何という変り方！ 葉子の記憶にあるかぎりの鎌倉時代の麻川氏は、何処か齷んだ黝さはあつてもまだまだ秀麗だつた麻川氏が、今は額が細長く丸く禿げ上り、老婆のように皺んだ頬を硬ばらせた、奇

貌ぼうを浮かして、それでも服装だけは昔のままの身だしなみで、竹骨の張った風紙たこがみのよう
にしゃんと上衣を肩に張りつけた様子は、車内の人々の注目をさえひいて居る。葉子は、
麻川氏の病弱を絶えず噂うわさには聞いて居たが、斯こうまで氏をさいなみ果した病魔の所業に今
更ふかく驚ろかされた。病気はやはり支那旅行以来のものが執拗しつように氏から離れないもの
らしい。だが、つくづく見れば、今の異形の氏の奥から、歴然と昔の麻川氏の倂おもかげは見えて
来る。葉子は、その倂を鎌倉で別れて以来、日がたつにつれどれ程懐しんで居たか知れな
い。葉子の鎌倉日記に書いた氏との葛藤かつとう、氏の病的や異常が却かえって葉子に氏をなつかし
く思わせるのは何と皮肉であろう。だが、人が或る勝景を旅する、その当時は難路のけわ
しさに旅愁ばかりが身にこたえるが、日を経ればその旅愁は却ってその勝景への追憶を深
からしめる陰影となる。これが或る一時期に麻川莊之介氏という優れた文学者に葉子が真
実接触した追憶の例証とも云えよう。

「私ずっと前から、お逢いし度たかったです。」

五年の歳月が、葉子を率直にはつきりしたものの云える女にして居た。

「僕も。」

氏の声はまた何という心の傷手から滲にじみ出した切実な声になったことだろう。

「鎌倉時代に、私はもつと素直な気持で、あなたにおつき合いすれば好かったと思つてました。」

「僕も。」

「ゆつくりお打ち合せして、近いうちにお目にかかりましょうね。」

「是非そうして下さい。旅からお帰りなつたら、お宅へいつ頃伺つて好いか、お知らせ下さい。是非。」

それから葉子の良人坂本とも氏はさも懐しげに話して居た。話のうちに氏が時々立てる昔のままの豪快笑いが変り果てた現在の氏の異形から出て来るのが一種妖怪ようかい的な傷ましさを葉子に感じさせた。

汽車が氏の転地先〇〇駅迄進んだ時、氏は誰かと一緒にシートから立ち上つた。誰か直ぐ忘れて仕舞つた程葉子は氏にばかり心を奪われて居た。氏は立ち際に「あなたが二度目に××誌に書かれた僕の批判はまったく当つて居ます有難かつた。」と云つた。それは鎌倉以後三四年たつた時分葉子が××誌から書かされたもので「麻川氏はその本性、稀まれに見る稚純なげきの士であり乍ら、作風のみは大人君子の風格を学び備えて居る為めにその二者の間隙や撞ぶつ着矛盾が接触する者に誤解を与える。」こんな意味のものだった。葉子がよ

り多く氏を理解して来たと自信を持ち出した頃のものだった。

汽車から降りてはつきりした早春の外光の中に立った氏の姿を葉子は更に傷ましく見た。思わず眼をそむけた。頭半分も後退した髪の毛の生え際から、ふらふらと延び上った弱々しい長髪が、氏の下駄穿^ばきの足踏みのリズムに従い一たん空に浮いて、またへたへたと禿げ上った額の半分ばかりを撫^なで廻^まわす。

「あ、オバ〇！」

不意の声をたてたのは反対側の車窓から氏を見た子供であつた。葉子は暗然として息を呑^のんだ。

「すっかり、やられたんだな。」

葉子の良人も独言のように云ったきり黙つて居た。

その日の夕刻、熱海梅林の鶴^{つる}の金網前に葉子は停つて居た。前年、この溪流に添つて豊に張られた金網のなかに雌雄並んで豪華な姿を見せて居たのが、今は素立ちのたった一羽、梅花を渡るうすら冷たい夕風に色褪^{いろあ}せた丹頂の毛をそよがせ蒼^{そう}冥^{めい}として昏^くれる前面の山々を淋しげに見上げて居る。私は果無^{はかな}げな一羽の鶴の様子を観^みて居るうちに途中の汽車で

別れた麻川氏が、しきりに想おもわれるのであった。「この鶴も、病んではかない運命の岸を辿たどるか。」こんな感傷に葉子は引き入れられて悄然しょうぜんとした。

その年七月、麻川氏は自殺した。葉子は世人と一緒に驚愕きょうがくした。世人は氏の自殺に對して、病苦、家庭苦、芸術苦、恋愛苦或いはもつと漠然とした透徹した氏の人生觀、一つ一つ別の理由をあて嵌はめた。葉子もまた……だが、葉子には或いはその全てが氏の自殺の原因であるようにも思えた。

その後世間が氏の自殺に對する驚愕から遠ざかつて行つても葉子の死に對する関心は時を経てますます深くなるばかりである。とりわけ氏と最後に逢つた早春白梅の咲く頃ともなれば……そしてまた年毎に七八月の鎌倉を想い追懷の念を増すばかりである。

また画家K氏のT誌に寄せた文章に依よれば、麻川氏はその晩年の日記に葉子を氏の知れる婦人のなかの誰より懐そうめいしく聡明なる者としてさえ書いて居る。それが葉子の思いを一層切実にさせるといふのは葉子は熱海への汽車中、氏に約した会見を果さなかつた、氏と約した通り氏に遇あひ氏が仮りにも知れる婦人の中より選くび信じ懐かしんで呉れた自分が、鎌倉時代よりもずっと明るく寛闊かんかつに健康になつた心象の幾分かを氏に投じ得たなら、あ

るいは生前の氏の運命の左右に幾分か役立ち、あるいは氏の生死の時期や方向にも何等かの異動や変化が無かったかも知れし難いと氏の死後八九年経た今でもなお深く悔い惜しみ嘆くからである。これを葉子という一女性の徒^{いたず}らなる感傷の言葉とのみ読む人々よ、あながちに笑い去り給うな。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十三巻」冬樹社

1976（昭和51）年11月30日初版第1刷発行

初出：「文学界」

1936（昭和11）年6月号

※「計画」と「計画」の混在は、底本通りです。

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2001年4月3日公開

2017年05月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鶴は病みき

岡本かの子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>